

## コロナ禍における小石原焼窯元の意識について

九州産業大学 学生会員 寺本海音・九州産業大学 正会員 山下三平  
九州産業大学 木村隆之 栗田融

### 1. はじめに

2020年の春に始まったコロナ禍の影響は、約3年を経た2022年の冬に至るまで、さまざまな産業に影響を与え続けている。とくに観光業は、人々の移動の増加により上向きの兆しが見られるものの、そのたびに繰り返す感染者増との調整に翻弄されざるを得ない。とくに店頭販売を特徴としてきた伝統工芸品の産地では、コロナ禍以前から課題であった後継者不足とともに、都市域との交流が大きく制約され、その影響が深刻と考えられる。

また伝統工芸の産地は来訪者に配慮して景観の整備を重視する傾向がある。コロナ禍による来訪者の減少がそれにどのような影響を与えているかが懸念される。

本研究は前報<sup>1)</sup>に引き続き、小石原焼の里を対象とする。小石原焼の里の生業・観光・風景の現状を把握し、個々の窯元のコロナ禍への考えや、窯元の小石原焼の里に対する思いを追究することを目的とする。本稿ではコロナ禍を挟んで行われている、九州の伝統工芸品の産地一般についての調査に関する文献<sup>2)</sup>を参照して、さらに考察を進める。

### 2. 研究の方法

#### (1) 小石原焼の里について

小石原焼の里は福岡県朝倉郡東峰村小石原に位置し、陶器協同組合に所属する44軒の窯元を中心に、小石原焼や高取焼の作陶、販売を行っている。小石原焼は1958年に柳宗悦の民藝運動をきっかけにして広く世に広まり、1975年に国の伝統的工芸品に認定された。東峰村は日本で最も美しい村連合に加盟しており、小石原焼の里も自然豊かで景観的魅力のある地域である。コロナ禍で中止になっていた「民陶むら祭り」が2022年から再開し、以前の活気が戻りつつある。

#### (2) 調査方法

2021年10月24日～11月20日に小石原焼の里で小石原の陶器協同組合に所属する44軒の窯元を対象に1)属性、2)作陶、3)販売、4)今後の見通し、および5)里の観光と風景についてのアンケート調査を行った。表-1に項目の概要を示す。

表-1 アンケート項目の概要

1.属性	2.販売	4.今後の見通し
窯元名	コロナのマイナス・プラスの影響	10年後の窯元全体の見通し
世代	売り上げの変化	10年後の各窯元の見通し
性別	具体的なプラスの影響	後継者の存否と親族以外の可能性
居住年数	3.作陶	5.里の観光と風景
何代目か	コロナのマイナス・プラスの影響	今後持続発展に必要な事業
世帯主か	具体的なプラスの影響	訪れる人々について
		環境の印象
		里の風景

### (3) 分析の方針

まず再度一次集計<sup>1)</sup>をまとめる。つぎに回答者属性をもとに窯元の意思をクロス集計する。そのうえでコロナ禍前後の変化を明らかにするために、小石原焼を含む九州の伝統工芸産業の職人を対象とし、2019年から継続的に行われている意識調査の報告である『九州産業大学伝統みらい研究センター論集』<sup>2)</sup>を参照する。

### 3. 分析結果

#### (1) 一次集計の概要

2021年10-11月に行ったアンケート結果の概要を表-2に再記する。全窯元44軒にアンケートを依頼した。一軒について2名までの回答を依頼した。結果として24軒・34人が回答した。

表-2 一次集計結果の概要。%の母数は回答者総数34人

属性	55.8%が60代以上 男性が女性の約2倍
販売	マイナスの影響が41% プラスの影響が59% ネット販売の拡大のきっかけになったが11名
作陶	マイナスの影響が68% プラスの影響が32% 時間的な余裕ができたが7名
今後の見通し	42%の窯元に後継者がいる 親族以外から後継者の可能性は4%
里の観光と風景	コロナ禍終息後訪れてほしいが100% 里の風景は観光資源として重要が23名

コロナ禍によるマイナスの影響が大きく、後継者問題が顕著だが、時間的な余裕ができたなどのプラスの影響もあり、訪問者への期待も大きいことがわかる。

#### (2) 各窯元のコロナ禍への姿勢 (クロス分析)

##### a) 窯元と販売

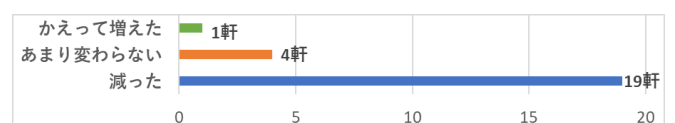


図-1 売り上げの変化

コロナ禍が焼物の販売に与えた影響には、「売り上げがかえて増えた」や、「あまり変わらない」という窯

元が5軒見られた(図-1)。この5軒の窯元が販売について、とくにプラスの影響として挙げたものを一覧として表-3にまとめた。

表-3 窯元とプラスの影響

	HS窯	HK窯	ME窯	HR窯	窯元不明
常連客とのつながりのつよさが確認できた	○	○			○
行政のサポート体制が強化された	○		○		
陶器協同組合が有効に機能した			○	○	○
ネット販売のきっかけになった				○	

これらの窯元は、常連客とのつながり、陶器協同組合の機能、および行政のサポートが有効と認識していたことがわかる。

#### b) 窯元と作陶

コロナ禍が作陶に与えた影響にプラス面があると応えた回答者が9人いた。それを窯元ごとに調べると、3軒の窯元で、プラスの影響が「ある」と「ない」で回答者の意見が割れた。

#### c) 窯元の今後の見通し

10年後の陶器協同組合全体としての見通し予想で「困難はあるが、いまよりよくなっているだろう」を選択したポジティブな考えを持つ窯元は8軒見られた。その理由を調べると、6軒に後継者がいることがわかる(表-4)。なお、前述の販売にプラスの影響があったと応えた窯元5軒のうち3軒には後継者がいる。後継者がいる窯元のほうがいない窯元より心の余裕があるためか、積極的な姿勢がみられることがわかる。ちなみに現在、小石原焼の里の数件の窯元は、外部から後継者を募集する後継者インターンシップを行い、積極的に後継者を探している。

表-4 窯元と今後の見通し

	YM窯	MW窯	HK窯	KH窯	KR窯	OM窯	ME窯	TY窯
問8「困難はあるが、いまよりよくなっているだろう」	○		○				○	
問9-1「新しいアイデアを考えて、自分自身、今よりも良い状態になっているだろう」	○	○						
問9-2「自分の世代と次世代ともに、良い状態になっているだろう」	○		○	○	○			○
問10「後継者の存否」	○	○	○	○		○		○

#### (3) コロナ禍前後の変化について

図-2~4に『伝統みらい研究センター論集』<sup>2)</sup>に報告されている、小石原焼の売上高、今後の見通し、およびネット販売についての調査結果を示す。これらは本稿のこれまでの内容に関連すると思われる。これらから、コロナ禍前後の変化を検討する。

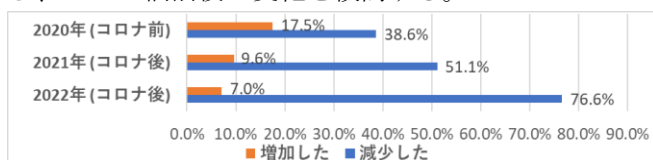


図-2 売上高 (2年前と比較)

小石原焼の売上は、2020年時点ですでに増加が減少を大きく下回っていたが、その傾向が2021年、2022年とより顕著になっていることがわかる(図-2)。小石原窯元が置かれている厳しい状況が理解される。

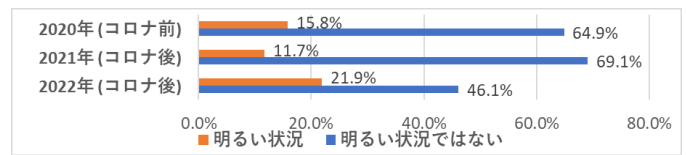


図-3 今後の見通し

今後の見通しも、2020年時点ですでに7割近くの窯元で否定的な見方が顕著であり、2021年も同様だった。しかし2022年には「明るい状況でない」が46%程度に減少し、「明るい状況」が22%程度に増える(図-3)。混迷の中にも積極的な姿勢が増加しつつある。

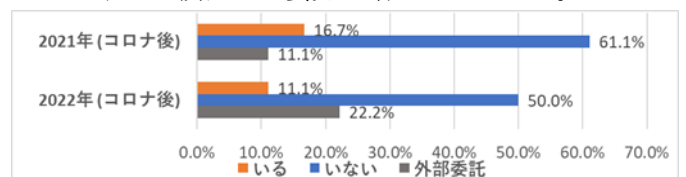


図-4 ウェブサイトを担う人材

小石原焼の販売をコロナ禍でも維持するためには、ウェブ販売が重要と考えられる。その担い手については、2021年時点では「いない」と応えた割合が61.1%であったのが、2022年では50.0%に減少している(図-4)。また「外部に依頼している」が11.1%から22.2%に増えている。緊急の対応から選択肢を増やして持続性を高める努力が払われ始めたものと思われる。

#### 4. まとめ

本研究はコロナ禍の続く中、小石原焼の里の人々の意思を、クロス集計と関連文献<sup>2)</sup>を用いて分析・考察した。その結果、以下のことが明らかになった。

- 1) 常連客とのつながりと、行政と陶器協同組合の支援が、とくに重要である。
- 2) 後継者がいる窯元は心に余裕が生まれ、考えがポジティブになる。外部からを含む後継者の招待支援には複合効果が期待できる。
- 3) 経年的に俯瞰すれば、厳しい状況にもかかわらず、積極姿勢が現れつつある。

以上のような窯元の中にみられる積極的な姿勢を互いに共有することで、今後のさらなる展開につながると考えられる。

#### 参考文献

- 1) 永本他：小石原焼の里の生業・観光・風景の持続に関する調査研究，土木学会西部支部研究発表会講演概要集，2022。
- 2) 伝統みらい研究センター論集，第2号～第5号，2019-22。